

令和7年度  
公開実力テスト  
中 3

国語

(タイプ01)

注意

1. この用紙は、先生の合図があるまで、開いてはいけません。
2. 問題は8ページあります。どの問題から始めてもかまいません。
3. 時間は30分です。
4. 先生の指示に従って、解答用紙の氏名欄に氏名を記入しなさい。また、その横の欄に氏名シールを貼るか、ない場合は指定の番号を記入しなさい。
5. 答えは、別紙の解答用紙に、はっきりとていねいに書きなさい。
6. 「やめ」の合図があったら、筆記用具をすぐに置きなさい。

 Z-KAI ×  秀英予備校

問題作成：Z 会  
秀英予備校  
© (禁複製)

1 次の——線部の漢字をひらがなに、ひらがなを漢字に直しなさい。(点画を崩さず丁寧(ていねい)に書くこと。)

- ① 負傷者を担架(たんか)に乗せる。
- ② 頑丈(がんじょう)なテーブル。
- ③ 世間の人々を欺(たぶらか)く。
- ④ 反省して罪を償(なぐさ)う。
- ⑤ 絵画を批評(ひひょう)する。
- ⑥ 大会でじゅん優勝(ゆうしょう)する。
- ⑦ 場にふさわしいふくそう。
- ⑧ 川の水のみなもとをたどる。
- ⑨ 目の前に広がった海をながめる。
- ⑩ 布を好みの色にそめる。

がぎょうさんあるけえ」

聞いているうちに、おぼろげな記憶(きおく)がよみがえってきた。

いつだったか、親戚(しんせき)の子どもたちとともに、真里亜も畑で茄子をもがせてしかつたから、さぞかし立派な実(み)だろうとわくわくしていたのに、現物は不格好(ふがっこう)で色つやもぱっとせず、内心(うちん)がっかりした。他の子たちも、「まずそう」「ぶさいく」と無遠慮(ぶえんりょ)に文句(ぶんこう)を並べていた。が、おとなたちは「食べてみてのお楽しみじゃ」と諭(さと)した。確かに彼らの言うとおりで、美しいとはいえない茄子は、焼いて食べればとろりとやわらかく、抜群(ぬくぐん)に味わい深(ふか)かった。

大叔父(おぢい)が若(わか)かった頃(ころ)には、地区(ちく)一帯(いちたい)でさかんに栽培(かいばい)されていた鶴海(つるみ)なすだが、もはや<sup>①</sup>扱(あつか)う農家(のうか)は二、三軒(さんけん)にまで減(へ)ってしまったという。

「え、それだけ？」

真里亜(まりあ)はぎよつとした。大叔父(おぢい)が頭(かぶ)を振(ふ)る。

「時代の流れ(ながれ)じゃけ、しかたねえが」

時代の流れ——なんだかいやな響(きこ)きだ、と真里亜(まりあ)は思う。どこかで似たようなことを聞いた覚え(おぼえ)がある、とも。

そうだ、アルバイト先の、あの古(ふる)ぼけた喫茶店(きつちや)だ。

営業後(えいぎょうご)の薄暗(うすぐら)い店内(うちん)で、店長(みせぢやう)もそう口(くち)にした。こんな時代の流れ(ながれ)に取り残(とこ)されたような店(みせ)、と彼女(かのじよ)らしくも<sup>A</sup>ない自嘲(じちやう)じみた調子(てうし)で。

「だめだよ」

とつぎに、真里亜(まりあ)は大叔父(おぢい)に言い返(かえ)した。

古(ふる)くさく、はやっているとはいえ<sup>B</sup>ないあの喫茶店(きつちや)が、真里亜(まりあ)は好き(すき)だった。世界中(せかいじゆう)中に支店(しでん)を広(ひろ)げるような店(みせ)では<sup>C</sup>ないけれど、それでも愛(あい)してくれる地元客(じよんきゃく)がいた。流行(りやう)のチェーン店(ちやえんみせ)にとってかわられて、悲(かな)しかった。口惜(くやく)

4 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

【古文】

これも今は昔、<sup>※</sup>丹後守保昌、国へ下りける時、<sup>※</sup>与佐の山に、白髪の武士一騎あひたり。路の傍なる木の下に、うち入りて立てたりけるを、国司の郎等ども、「この翁、<sup>※</sup>など馬よりおりざるぞ。奇怪なり。とがめおるすべし。」といふ。ここに国司のいはく、「<sup>※</sup>一人当千の馬の立てやうなり。ただにはあらぬ人ぞ。とがむべからず。」と制して<sup>①</sup>うち過ぐる程に、<sup>※</sup>三町ばかり行きて、大矢の<sup>※</sup>左衛門尉致経、<sup>※</sup>数多の兵を具してあへり。国司会釈する間、致経がいはく、「ここに老者一人、あひ奉りて候ひつらん。致経が父、平五大夫に候ふ。堅固の田舎人にて、子細を知らず、無礼を現し候ひつらん。」といふ。致経過ぎて後、「<sup>②</sup>さればこそ。」とぞいひけるとか。

(「宇治拾遺物語」による)

※丹後守保昌：現在の京都府北部にあたる丹後国の国司の長官である藤原保昌のこと。国司とは、各国を治めるためつかわされた役人。

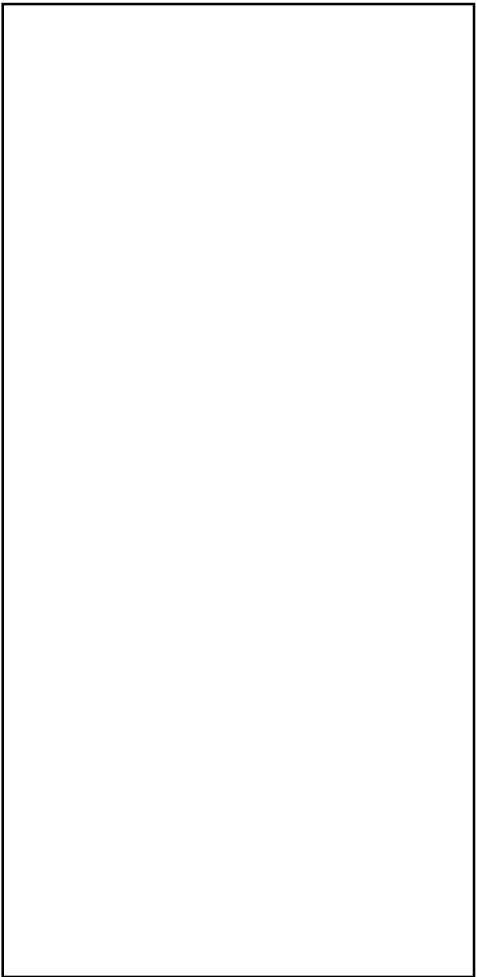
※与佐：現在の京都府北部にある与謝郡のこと。

※一人当千：一人で千人分の戦力になるような優れた戦士。一騎当千。

※三町：距離の単位。一町が約一〇九メートルにあたる。

※左衛門尉致経：宮廷の警備にあたる役職にあつた平致経のこと。弓の名手として名をはせた。

【現代語訳】



(1) 「立てやう」を現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。

(2) 「制し」の主語として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア 丹後守保昌
- イ 白髪の武士
- ウ 国司の郎等ども
- エ 左衛門尉致経

(3) 「<sup>②</sup>さればこそ」とあるが、保昌はどうしてこのように言ったのか。このことについて説明した次の文の **a** に入る言葉を五字で、**b** に入る言葉を二字で、それぞれ【現代語訳】から抜き出しなさい。

馬に乗っていた **a** が、弓の名手である **b** の父であるということを知り、「思った通りあの **a** は勇ましい優れた武将であったのだなあ」と感じたから。

(4) 本文の内容に合うものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア 保昌とその家来たちは、山中の木の下で休息をとった。
- イ 国司の家来たちは、白髪の武士に終始無関心だった。
- ウ 保昌と出会った時、致経は大勢の兵士を引き連れていた。
- エ 白髪の武士は、都の事情に通じておらず保昌を怒らせた。